

「心の通じた熱いプロジェクトが、 結果を成功に導いた」

1989年からケニアのツアボ・イースト国立公園内の小屋に住み、野生のアフリカゾウの調査・研究を続ける中村千秋さん。ゾウとの間にトラブルを抱える地域住民に、自然生態系やゾウ保護への理解を得てもらうため、村の女性たちによる生活改善活動を支援している。女同士の心が通じた熱い活動は、彼女たちに何を残したのか。



photo by Yokota Yukinori

挑戦者たち
Stories of
Challengers
Vol.19

アフリカゾウ研究者と コミュニティー・ワイルド ライフ

「コミュニティー・ワイルドライフ」という言葉を聞いたことがあるだろうか。これは、野生動物と人間が混住する地域において、地域住民の生活改善に取り組むことによって彼らの野生動物への理解を深めてもらい、結果として自然保護という目的を達成しようという試みだ。1990年代にコミュニティー・ワイルドライフが生まれる前は、住民は自然保護のための犠牲となるのが普通だったが、今では彼らを主体とする自然保護へと

変わりつつある。中村千秋さんがケニアで取り組む活動は、その一つの事例といえるだろう。タンザニアとの国境近くにあるツアボ・イースト国立公園に

中村さんが住み始めたのは、89年のこと。アフリカゾウ研究者になるという中学生のころからの夢がかない、ケニアに本部のあるNGO、アフリカゾウ国際保護基金(AEFFI)の研究課代表として、野生のアフリカゾウの研究を続けてきた。野生ゾウは季節の変わり目に長い距離を移動する。人口が増え、国立公園の近くまで居住地を広げた人間が、移動中のゾウと遭遇し、驚いたゾウに殺され

たり、畑を荒らされるといったトラブルが起きている。中村さんの研究は、ゾウが採食する植物の栄養成分の変化が、ゾウの季節移動に何らかの影響を与えているのではないかという仮説を実証するためのものだが、その最終目的は、野生ゾウの保護と人類との共存につきる。

「ピリカ女性たちの会」 との出会い

93年4月、国立公園を管轄するケニア野生生物公社にできたばかりのコミュニティー・ワイルドライフ課の係官から、中村さんはある相談を持ちかけられた。ツアボ・イースト国立公園に隣接するピリカ二村の母親たちが、水の問題で悩んでいるという。水源から村まで引かれていたパイプが水道局の予算の関係でカットされ、彼女たちは何キロも離れた水場まで水くみに行かなければならなくなってしまったのだ。重い水を運ぶのも大変



フィールド調査でゾウのふんを採取する中村さん(1991年撮影)

だが、その途中でゾウに襲われることを彼女らは恐れていた。水の問題を解決しようと村の母親たちが立ち上げた「ピリカ女性たちの会」に会うため村を訪れた中村さんを待っていたのは、彼女たちによる歓迎の歌と踊りだった。木陰に用意された会合の場で、会の代表がただどしく話を始めた。

「ケニアでは外国人がいきなり行くと、カネとモノを期待するようになるところがあるんですが、そのときも結局、私にパイプを寄付してくれという話だったんです。でもそんなお金、私にはないし、与えるだけの支援はしたくありません」

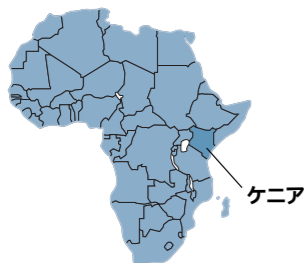
「パイプの寄付はできない」という中村さんの言葉に、母親たちの期待は一気に落胆の表情へと変わった。しかし、自分たちがパイプを得るための活動は支



中村さんが日々研究を続けているツアボ・イースト国立公園の野生のゾウ。ケニア政府にとって、こうした野生動物を見に来る観光客がもたらす収入は大きい



フィールド調査はレンジャーを伴って行くこともある。四輪駆動車で双眼鏡、ノート、カメラ、水や食料のほか、車が故障したときのためのロープやジャッキなどの工具を積み込み、サバンナで地道な観察を続ける。その日、ゾウに出会えるかどうかは運まかせ



ケニア

Nakamura Chiaki

アフリカゾウ研究者

中村 千秋

援すると約束し、母親たちとの長い付き合いが始まった。

中村さんがゾウ研究者になつたのは、動物好きだったからではない。アフリカの人々のために何かしたいという思いが先にあり、後に恩師となった動物学者の小原秀雄氏の影響を受け、アフリカゾウの研究に行き着いた。「最初はゾウを追いかけていましたが、アフリカの地域住民への思いも深く、自分の研究を広げてみたいという思いがふつとわいてきたんですね」

自信をつけた母親たち

母親たちは自力でパイプを調達するため、さまざまなアイデアを出し合った。その一つが、洋裁を習い、服を売るといったもの。中村さんは、当時、小原氏が代表を務めていたA E F I Iの日本支部に相談し、ミシン3台を寄贈してもらった。洋裁の講師は村で仕立屋をしていたおじいさんに頼んだのだが、母親たちの腕はなかなか



中村さんが寝起きする調査小屋。ここからは、ナイロビなどの都市や日本の自然生態系が完全に崩壊していることがよく分かるという。「多くの野生生物を排除したゆえに起きる危険が、私の目にははっきりと見えるんです」

上がらない。「最初は、彼女たちに読み書きなど基礎的な学力が足りないからかなと思っただけですけれど、よく見てみると、おじいさんがどうもちゃんと教えていないんです。小学校も十分に通ったことのない母親たちを講師

のおじいさんは見下し、「教えてもどうせできないだろう」と、縫製の仕上げを自分でやってしまつた。「そういう人が教えている以上、お母さんたちは自信を持たないんですよ。自分たちには絶対できない」という変な自信はあるのに。この活動は、彼女たちに自信を持ってもらうためのものだから、その先生には辞めてもらいました。大げんかして(笑)」

その後、母親たちと同じ目線で熱心に教えてくれる女性が見つかり、みんなの腕はめきめき上達した。また、国際ボランティアア貯金の助成を受け、会専用の作業場も建てた。そして、この「洋裁プロジェクト」がJICAの草の根協力支援型の事業に採用され、ますます会は元気になつていった。



現在、洋裁にかかわっている会のメンバーは30人ほど。そのうち、25人が洋裁士の国家資格を取得した。今、彼女らが作る「ピリカニシャツ」が好評で、その売り上げが会の活動を支えている

自信をみんなに与えましたよね。2年3カ月にわたるJICA Aの支援で、作業部屋を拡張したほか、母親たちの強い希望で識字教室も実施された。洋裁を人に教えることのできる2級国家資格を取る者も出てきた。

懸案だった水パイプは、案外早く手に入れることができた。国立公園の最高指揮官から、使っていたパイプが公園内にあるのを聞いた中村さんは、母親たちが自ら交渉するよう働きかけた。すでに指揮官からパイプを譲ってもらった約束を取り付けていたが、会には内緒にし、あくまで彼女たちの力で得るようにしたかったのだ。

ピリカニに続け

「洋裁プロジェクト」は、村にさまざまな変化をもたらし、母親たちの家庭は服を買う必要がなくなったため出費が減り、お母さんの手づくりの制服を着た子どもたちは大喜びした。識字教室に通う母親が家でノートを広げると、そばで子どもが勉強を始めた。そして、夫たちも変わった。「学校へ行ったことがなく、夫にいつもばかにされ、殴られていたお母さんがいたんですよ。でも、彼女が作ったスーツを着

て、お父さん、もう大喜び！」ケニアの農村部では男尊女卑の風潮が残っているが、ピリカニ村の男性は女性に一目置くようになったという。会のメンバーの中には、自分で作った服を売って収入を得ている人もいる。こうして生活に余裕が出てきたことで、村人のゾウに対する意識も変化した。ゾウに多少畑を荒らされても、大目に見ることができるようになった。

か理解してもらえよう、教育に力を入れていきたい」中村さんは母親たちに、「私たちのプロジェクトは何を残したと思う？」と聞いたことがある。「すると、みんな口を揃えて『モヨ(心)』だつて言うんです。支援する側とされる側の心が伝わるプロジェクトが、長く続くんだと思う」。今、ツアポ・イースト国立公園の周辺に、「ピリカニに続け」とばかり、独自の活動を始めた村々がある。「ピリカニのお母さんたちには、『モヨ』のあるプロジェクトはこうなんだつていうのを、ほかの村に伝えてほしい」。



中村さんがガイドを務める教育エコツアーで訪問し、ピリカニでボランティアをする大学生。日本からツアーに参加した大学生などが、母親たちの活動に賛同し、学園祭やフリーマーケットでピリカニシャツを売ってくれる

「国立公園から来た研究者が自分の村で助っ人をしてくれている」ということが、村人の意識を自然保護に向かわせている

よき教育者を探すこと

記事を読むと、中村さんの支援がいつもうまくいっているように思うかもしれないが、「こうして話すほどスルッとしたものじゃないですよ。もちろん、でこぼこ、ぐちゃぐちゃしています」と、プロジェクトの紆余曲折を打ち明ける。

中でも苦労したのが、「ピリカニ女性たちの会」のメンバーたちに洋裁や識字を教える先生探した。最初、洋裁の先生として招いた村の男性は、自信のない母親たちの能力を伸ばそうとしなかった。なかなか上達しない原因が先生側にあると気付くのに、さすがの中村さんにも時間がかかった。

しかし天は見捨てていない。活動の途中から入った女性は、給料が安くとも母親たちのために働きたいと、熱い心で接してくれた。また、識字教室を始めるとき、地元の住民が「あの先生は絶対相手を見下したりしない」と太鼓判を押した元小学校教員の男性は、初めて文字を習う母親たちに根気強く教えてくれた。

「教育の一番の基本は、生徒を低く見ないことだと思う。それがケニアの農村部の人たちには理解されにくい。教える側が偉くなってしまふ」と中村さんは言う。会の活動がうまくいったのは、中村さんと母親たちの心がつながったこと、その心を理解するよき先生に恵まれたことが大きいだろう。